

を出し、初は紅に、老ては赤黒くなる、其初出を嬰兒婦女と目て翫ぶ、其形上巳の縷人に肖たれば也、焙て食ふ、又鍋に入、燥炒ば、珠粒脹拊て梅花なすあり、又子を炒磨て沙糖に和て菓子となすべし、或は飯に炊き酒媒にまじへ、或焼酎に造る味旨し、莖亦汁ありて微甜し。

〔本朝世事談綺生植〕玉蜀黍なんげんまき

天正のはじめ蠻舶持來る關東にては唐もろこしといふ、

黍栽培

〔農業全書五穀〕黍

黍は黄白の二種あり、粘るをもち黍とし、黄にしてねばらざるを粳とす、又赤き黒きもあり、四月始うゆるを上時とし、同じ中旬を中時とし、下旬を下時とす、これつねの法なり、小きびは五六月蒔てもくるしからず、早過れば虫氣する事あり、是も地心は粟に同じ、薄く瘠たる地には宜しからず、種て六十日にして秀で、六十日にして熟す、又云、きびを種る事、三月上旬を上時とし、四月上旬を中時とし、五月上旬を下時とするなり、又、椹はらあかき時黍を種べしとも云り、又黒墳は麥と黍とに宜しとて、性の能黒土に取分よきと知べし、又新に開きたる地を、冬より度々細かにこなし、さらし、こゑをうちてからし置たるに、灰ごゑ、又は熟糞を肌ごゑにして、薄くまき、二三寸生出たる時、中うち芸り、まげき所をば間引て、手入三遍すべし、其外は粟に同じ、其所々により、蒔しほ殊に大事の物なり、時分違へば穂に出ぬものなり、若穂に出ても實らぬ事あり、是も地により過分に實ある物なり、

〔齊民要術二〕黍稷

凡黍稷曰、新開荒爲上、大豆底爲次、穀底爲下、地必欲熟、再轉乃佳、若春夏耕、一畝用子四升、三月上

旬種者爲上時、四月上旬爲中時、五月上旬爲下時、夏種黍稷、與植穀同時、非夏者大率以椹赤爲候、

諺曰、椹厘、重種黍時、燥濕候、黃場、始章、種訖不曳撻、常記十月十一月十二月凍樹日種之、萬不失一、凍樹者、凝